

お盆風景

今年も八月十三日から二十日まで、一日も欠かさずお墓参りをした。特別に信仰心が厚いというわけでもないのに、これも永年の習慣なのだろう。

それにしても、ここ二、三年の間にずいぶんお墓も整備され、気持ちよくお墓に行けるようになったのはありがたいことだと思ふ。簡易舗装された道路

故郷を想う 福井孝平

になって昔のおもかげはない。墓そのものも立派に建てられているのを見ると、不況の感などは無い。どのくらいの人がお詣りするのかわからない。古平の何倍にもなる人の数でしょう。もちろん礼拝方面、そのほかから日帰りの人も来ているのでしようが、おそらくお盆休みを利用して、それぞれ幾日か泊まっ

なかいせいで失礼する人が多い。お許しあれ。

この機会にクラス会なども多見受けられる。いつに変わらぬ古平のお盆風景である。

苦言で申し訳ないが、せっかく墓地が整備されたのに、供物その他のゴミを片付ける習慣が今にして無いのは残念である。お互いに気をつけましょう。これはチョットした心掛けでできることだ。

人はみな善人であることを信じて――。

大早（ひでり） 花圃枯れつく
す武道館
盂蘭盆会にはなくとも五目飯



（*下段から） 明治生まれの主人に、チョッピリ昔の子どもの遊びを語ってもらいました。

遠い思い出が いまも

渡辺 ハツエ

私の住む御崎町は、昭和二十四年五月の大火の後に区画整理されて、入船町から分離したものです。

子どものころから慣れ親しんできた入船町から、御崎町の住人となって四十四年、町名が変わったからといって別に生活に支障をきたすこともなく、今では安住の地となっています。

永い歳月を省みますと、いろいろと懐かしいことが脳裏に浮かんできます。

昔の入船町は、鯉場の網元の町といっても過言ではないほどで、十余戸の網元の家と干場があり、道路をはさんだ浜も網元の所有地でした。

春の鯉漁期が終わると、漁師や数の子を干していた広い干場は、子どもたちにとつての格好の遊び場でしたから、昔の子どもたちは、遊び場には困りませんでした。

自分たちで遊びを考え、考案した道具を持ち寄っては、楽しんで遊んだものでした。

遊び道具の主なもの、コゲ、たが廻し、竹馬などいろいろありました。

コゲという語源ははっきりしませんが、生の雑木を三十センチぐらいに切つて、先を尖らして作ります。柔らかい土の所を選んで、水を注いで刺さりやすくしてコゲを突き立てると、相手はそのコゲにぶつつけてそれを倒そうとします。倒されたコゲは、相手に取られてしまいません。自分のコゲが一本も無くなつてしまうと、「身代ポロポロになった」と言つて、くやしがつたものです。

当時は、柴を焚き物にしていましたから、コゲを作る材料には事欠くことはありませんでした。

昔、主人が、小学二年生の甥に竹馬を作つてやったことがありました。甥は一生懸命になつて練習をし、わずかの間で上達して、楽しそうに乗つて遊んでいたことが、とても懐かしく思い出されます。（二段目へ*）

ふる里のこうとば

浅利 喜美子
(旧姓・高野名)

昨年から、主人の仕事の関係で道南の江差町に住むことになりましたが、古平にでも帰ったような懐かしさを感じるのにはなぜか？ と、不思議に思っていました。

それがわかったのです。「海」と「言葉」なのです。

今、古平でも使われているかわかりませんが、私の子どもころは確かに使っていた言葉なのです。

江差と古平は、日本海沿いの追分ソールラインで、かつて鯨漁でにぎわった町であり、共通点が沢山あるのは当たり前としても、こんなに今も、昔の言葉が残って使われているのに驚きました。主人がわからないのを通訳？したり、懐かしくてメモをしました。

- ・ジョッピンかうカギをかける
- ・チョスIIさわる、いじる
- ・ホンズケナイIIピンとこない
- ・バグルII取り替える

感じない

- ・シモウIIしみる
 - ・ホトルIIほてる、あつくなる
 - ・ホイドIIいやしい、乞食
 - ・ケルII(物を)上げる
 - ・ンダ、ンダIIそうだ、そうだ
 - ・酒ツンデII酒をついで
 - ・エサイグノII家へ帰るの
- といったぐあいです。私と同年代か、それ以上の方にはおわかりだと思えます。

石碑を訪ねる

「五百羅漢の由」

昭和四十八年九月
曹洞宗禅源寺

種田富太郎が、大正八年に五万円を拠出して五百羅漢を寺に寄付したが、身内の人の記録によれば、当時の種田家の年間の所得は二百万円以上あったとも言っている。しかしその後、政友会に所属し道会議員に当選してから、政治で相当に金銭を消費したようで、岳転和尚はその手記の中

で、「政界でかなりの金を浪費して：：」と、心配そうに書いている。「五百羅漢の由来碑」は富太郎二十五回忌に建立されたもので(檀家総代 齊藤林蔵)、その側に建てられている石灯籠の下には、富太郎夫妻の遺骨が分骨されて埋められていると言われているが、確認にも無い。

海のある町に住める幸せは言葉だけではなく、食べるものにも感激があります。

・くじら汁

・ササゲとすし鯨の三平汁

・イモだんごとカボチャのだんご汁

・コーレン(うるち米を蒸して練ってのばした、せんべいのような菓子)

・けいらん(来客のあったときなど、白玉だんごの中にあんを入れ、シイタケの冷たい汁をかけたもの)

など、昔、母がよく作ってくれた味が、まだいっぱい残っているんです。

土地の人たちとも、そうした共通点からすぐ親しくなれて、古平に生まれて良かった、とつくづく故郷のありがたさ感じています。

毎年、古平へ兄妹で山菜取りに行っていました。小樽の兄が先日亡くなりました。さびしくなりましたが、故郷はいつまでも昔のままであってほしい、と思うのは我がままなのでしょうね。

もともと、都会より自然豊かな田舎の方が好きなので、今までの生活を満喫しています。

下駄職人として

想うこと

小野 寺 博



職人。という言葉が最近あまり聞かれなくなりました。昔は、職人といわれる人が各業種にたくさんおりました。今では消えていった業種が多く、その中で技を磨き技術に誇りを持っていた、職人と言われる人たちはめっきり少なくなりました。

だんだん消えて行く職人の中に、「下駄職人」があります。昭和の初めころには、古平でもかなりの下駄製造所があつて、そこには下駄職人がいて賑っていました。ざっと数えてみても古谷さん・大島さん・本間さん・金子さん・佐久間さん・小野寺（以上浜町）本間さん・福島さん（港町）栄利さん・佐々木さん（新地町）と、十軒ほどもありました。ほとんどは戦前か戦中にやめてしまつて、この内いま残っているのは私の所だけ一軒になってしまいました。

私の父も、五、六人の職人を使つていて、工場前の空き地や屋根には、製造途中の下駄を多数積み重ねて乾燥させている風景は、なかなかの壮観でした。ところが、昭和十年ころから靴が普及するようになると、下駄の需要は次第に減りはじめました。そのため、職人たちも转业する人が多くなり、昭和十二

年ころには、古平で下駄を製造しているのは四軒になつてしまいました。そして職人の高齢化と共に、後継者もなく廃業してしまい、昭和三十年ころには私の所一軒になつてしまい、父と職人と私の三人でやつていました。それが、それもだんだん先細り状態でした。

それでも北海道には、大きな下駄製造工場が数か所ありましたが、やがてこれも廃業に追い込まれてしまい、昭和五十年ころには一軒も無くなつてしまいました。現在では本州方面で作っている下駄が、道内に出回つ

衝撃！『鯨魚獲ゼロ』

古平小学校の運動会延期

【昭和5年】

その昔、古平場所が開かれてから古平を支えてきた鯨魚は、明治時代は不漁知らずであつた

し、大正時代には豊漁時代を迎え、この時代の年間の平均漁獲

高は約四万石（三万トン）と最高潮で、今も残る豪壮な鯨魚家の

のほとんどはこの時代に建てられたものである。

昭和に入るとそれが一転して

凶漁時代と、ここに鯨神話は崩れてしまった。

昭和五年、「春になれば鯨は来るもの」と思いこんでいたが

この年は予想もしない「漁獲皆無」という惨状であつた。記録

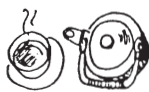
では三石というから、わずかに磯舟一隻分に過ぎなかつた。

その影響はたちまち町民の生活を直撃し、それによる町内の

ています。

早いころから私のところでは古平や美国の神社のお祭りの天狗さんの足駄を作つていた関係で、今でも下駄を細々と作っています。私にはもう副業であつて、私は下駄を作るのが大好きです。これはもう私の生き甲斐でもあります。

「下駄職人の技を無くするな。伝統の技術の灯を消すな！」との想いで、現在も、これからも私が元気で働けるうちには、下駄を作つていくつもりです。



損害額は二十数万円といわれ、これは古平だけにとどまらないで後志沿岸の町村に大打撃を与えた。

古平小学校では保護者会の要望もあり、春の運動会をとりあえず延期することにし、改めて九月五日、通称、本陣の干場で運動会を行った。

当時の運動会の様子を知る人も多いが、走るときの合図には本物の鉄砲（空砲）を打ち、遊戯のときは先生や町の人がバイオリンを弾き、太鼓を打つて音楽を流したという。